

天保十三年、京都滞在中の小島宝素の書簡

町 泉寿郎

はじめに

本誌四二巻三号の拙稿「小島宝素著・森立之写『河清寓記』
『河清寓記』で触れたように、日本大学医学部図書館所蔵の「小島
宝素尺牘」は天保十三年秋冬の小島宝素の京都訪書行を具体
的に伝える好資料である。『河清寓記』が記載書目の豊富さと
いう点で貴重であるのに対し、宝素書簡は古書探索をめぐる
人物の動向を伝えている点が貴重である。いずれも『経籍訪
古志』の成立過程を考察する上で不可欠の資料である。先の
『河清寓記』積読により、難読の宝素書簡を積読する準備が
できたものと考え、ここに翻刻と釈文を試みる。書簡は、恐
らく訪書先での謄写用と思われる。鳥の子薄様の美濃判無罫
の紙、計二八枚に書かれており、執筆当初から通常の書簡の
ように紙と紙が貼りつながれることはなく、現在見る一枚一
枚独立した紙に書き継がれていったものと考えられる。それ
故、元来貼られていた紙どうしが離れた場合と違い、字面の
高さや虫損の状態や紙の継ぎ目箇所の字様の照合等の方法に
よって各紙片の続き具合を判定することは困難である。各紙
には近年の整理時に与えられたと思われる仮整理番号が付さ

れているが、必ずしも依拠できるものではない。また仮整理
番号②⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓の紙の裏面にはそれぞれ〇二・〇三・
〇一・〇二・〇五・二・三・四という墨書が下方隅にあり、
断定はできないが、発信時または受信時の書入と思しく、書
簡の内容上からもこの記載に従って問題がない。しかしこの
記入は上記の八枚に限られており、残りの二〇枚に関しては、
内容上の脈絡と書体の近似によって判断するしかない。そこ
でまず仮整理番号順に従って翻字を行ったのち、相互間の脈
絡に関する私案を提示し、しかるのち私案による釈文を掲げ
ることとする。

〈翻刻〉

①

蒞庭先生侍史 質

謹啓朝夕者冷氣相募候処

益御清穆被為在恭賀

至極ニ奉存候抑去廿二日到

着以後塵紛蠟集之中ニ

保生院訪来及寛晤候処

聖惠宋本校対いたし

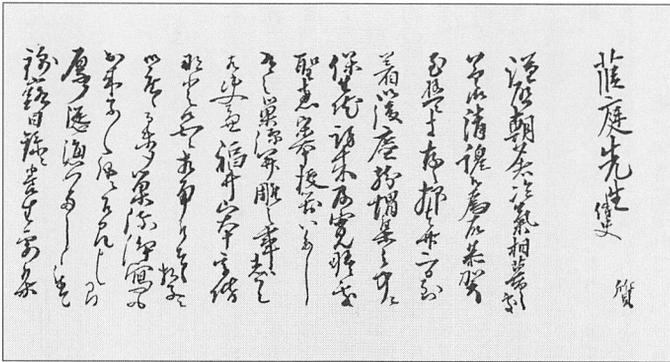
有之巢源開離之事ハしかと

相決兼福井山本高階

など色々相争罷在候様子ニ

御座候而未夕巢源浄写も

出来不申様ニ相見申候間
厚ク懇憚いたし置候
錦小路目録ニ養生要集



小島宝素書簡 (10月1日書簡の冒頭)

② 明堂図医心方足本太素

新修本草足本等相見申候
虚実不相分小品者一軸分

御室より錦家へ先年借来

微力ニ而写ニ及兼候様子ニ

承及候間専ラ搜索心懸

罷在候保生院へよろしく申上度

被聞候

一廿八日早朝与夜分ニ福井

父子閑話仕候九十老人

如六十人ニ御座候太素原

卷なと取出申為見申候

就中

楊氏家蔵小字宋本吉氏家蔵印アリ

不足本ニ而荻野本ニ

より補写

宋本夷堅志甲乙丙三集

元版杜氏玉函經

(裏に「〇二」の書入あり)

③

素問釈義六冊

宋槧零本白氏六帖事類集一冊

一覽金沢本三卷

吹田クワ井

右之類中々耆人之力ニ而者

早喪之内校写卒業

致間敷候間通一甌申候契

約仕候分ハ早々返却尚又

借受申度候間何卒筆

者多人御用意可被下候

校対之事も諸君へ相願

申度候何分ニも手ニ入申候品

無之其段者失望之次第ニ

御座候発足前宋本外台何

分出兼申候在京中

万事省略いたし罷在候処

多分之物入意外之事態ニ而

御座候得共無別条在勤仕候段

御放意可被下候乍去京医

之氣受よろしく福高未見

之分も発洩いたし申拙老より

追々福高へ転借之事も

相約申候是ハ江戸風ヲ希候

④

書目

一 壱両貳朱

一 医学四種二帙

一 本草綱目求真二帙

一 三両貳朱

一 弁症奇聞二帙十卷 銭松道光二年自序

一 壱両貳朱

一 医学括要一帙

一 鮑刻名医類案三分貳朱

一 本有林福田方式兩壱分アリ目安

一 申越申候安良様被仰上可被下候

又

一 石渠閣訂正食物本草十卷

一 李杲

一 卷七マテ同題

一 卷八石渠閣訂正日用本草ト題シ

一 有之元吳瑞

一 食物本草三卷陳繼儒校正

一 右巾箱小本二部一函代壱兩壱分

又

一 袁元熙刊本局方壱方半

⑤

一 徐氏鍼灸四匁五分

一 傷寒全生集貳分

一本草集要吉氏家藏本卷兩式朱

一明目良方卷式朱

一外科正宗卷分唐本書足有之

一五雅三分式朱

右之類今朝申來候間

申上候弁症奇聞

相応ニ相見申候御目

録中無之哉ニ

相見候間申上候

勿々頓首

十月朔日

(活字テナシ
朝鮮小字)

尚々宋版東坡集
本得効方殘本三冊手二入

申候右件奉告候

⑥

一筆啓上仕候御用人

御代拜被罷登候ニ付松

御殿様益御機嫌遊

御座候旨奉伺奉恐悦候

朝夕者寒氣相催申候処

弥御莊健被為在奉拝賀候

抑先達而以來福井父子

不一通取扱ニ而追々秘藏も

借読いたし彼是周旋申候

高山寺経藏も相搜

申候処何分張孫両氏之書

無御座候論語莊子等之

古卷本而已ニ御座候香字

抄類之者も相見申候得共格

別之品無之候十三日再度

(行間追伸)

尚々冷中在京中者ニ

弟子共初取締方心

配仕候処先々平穩ニ而

安心仕候

江都之御様子奉伺度候

(以下難読につき省略)

⑦

早便被仰知可被下候尤回木之信ニ而

元仲悴へ直対も可仕候得共

此節同人専風俗之愚説申出

致牢舎罷在哉ニ而中々

罷越兼候次第ニ御座候堂

上之短冊懐昏畏候
先日近州先達ニ而登母尾高

雄申候霜葉ノ様子目忘婦

申候梅尾方便智院十無尽院

両僧欣接玉篇其外古経

史残軸一見仕候石川年足

真跡之経其外二も仏経夥敷

又解脱明恵等之消息和氣

広世之写経なと有之趣之処

初更ニ相成見残し申候葎

生月令等無之候から櫃弘仁

建久等之朱書相題申候物

一百余函有之候一時出蔵相

成兼申候哉ニ申居候近日又

了伴相携罷越候事ニ御座候

伴子来ル十五日発足出府候間

⑧

御直聞可被下候卑意医籍

而已ニ専心罷在候間积典文書

如木石過眼仕候然ル処何分

医書之類福高両氏之搜

索行届候間草沢之医生も

化余風聚書之事ニ力ヲ用候

間玉機微義なとさへ生羽翼

申候而致飛行候朝鮮本素問

残本手ニ入申候得効方も整版ニ而三冊

ニ御座候七日高階安芸守之招ニ而

七十老翁病後二者御座候へ共談論

面白く御座候鷹峯ニ隠棲

罷在候修竹小径回曲三四十歩

張師之祠堂有之其傍ニ座敷有

之幽静之場ニ而御座候

元版巢源 清人影宋小楷総病

論 宋本々草衍義与望月本小異なる

様ニ而 元初之昏ニ可有之哉

汪濟川方歛吳勉学之巢源も一々

相揃清人写本も御座候へ共仿汪本ニ

御座候校正も相応ニ相届居申候

明清之書迄丹鉛満万書

⑨

出老翁之手申候 胎産要録

上下卷朝鮮之撰述欵 素靈微蘊

黄元御道光十年刊本 素問积義張琦道光九年刊本

二書格別之ものニ無之哉ニ相見申候

徐注金匱も刊本ニ御座候□嘉靖本医

説藩本之祖欵大略右之類ニ而又十三日ニ

罷越申候積り御座候此翁謝世縁

昼夜誦読筆記消残年申候様

申居候然ル処福井之所蔵ハ相互ニ

秘惜いたし懸解なと高階より

借遣類聚一冊も僅写候様なる

情態ニ而春輩之中間ニ相夾

まれ崇蘭之所蔵取出し申候事

悦罷在候へ共崇蘭ニ而ハ高階へ

遣加意申候様ニいたしたき様子ニ

相見申候不堪一笑奉存候

何卒何卒以小翰御安否相伺

御高説も相同度老後之至願ニ

御座候様申出候尤巢源其外総病

論も直ニ借渡申候様なる氣質ニ

御座候江戸へ持帰候様申居候

旅舎ニ而校読いたし候へハ手広く

⑩

搜索之専心行届申間敷自蔵之分ハ

幾部ニ而も秘本持帰候様ニ呉々

申居候間甚都合宜敷御座候

倅美濃守好学之様子ニ承及候

評判ニ而ハ不及近州と申候翁ハ大

略恕公与良知混合いたし望鹿門

之好書ヲ取交セ嚴毅愿純之叟ニ

相見療治も張師之規模ニ相遵

葛陶孫王之辺ニ而事ヲ為濟張

劉李朱之方ハ用ヒヌナト申

居又香古之余流ニも無之候再接

而還尚觀閱之書目可申上候也

三角格別之品無之様子伊良子

多分相蔵福高之力ニ而出不

申候趣被聞候錦某良ニ可

信古書無之候へ共御室之外戚御実母之所生家

ニ而太素之類ハ自在ニ相成申候

事ニ御座候小森典葉頭ハ丹

波家之嫡流ニ而これハ古物も可有之候様ニ

申居候医学院無一書候

同人別家畑隆平好古篤学ニ而

少しハ書物も相残居申候間伺

⑪

見可申被聞候未罷越候

海保生無別条看楓記致左右候

京中風物尤妙無邊賞遊候

隆法眼盛寵可嘉々々

大小天狗集会云々欣羨

之至欣賞略目拜見相願

申候古書画可疑もの而已

持来申候間骨董御留ニ仕候

春日卓も見当り不申候

素人之同臭味ニ相頼置候へハ出来可申候哉ニ御座候美人も

夥敷入目候得共粉黛満面

不足動心候間京洛多佳人

青娥与朱唇……何物真是

真ト申寓言ヲ吐出申候へハ畑

隆平之説ニ是ハ福井之

朱欄玉廉ヲ諷シ申候もの欤

与一笑仕候弘正嘉万前後

之刊本子集なとハ多く相見へ申候間

略目先日寄九層去候未得

報書候浪花書目も取寄候

⑫

得共為差ものも無之候右件

草略奉復候時將寒矣為

道自重惟祈候 弟子質 稽首

拜復 十月九日

奚暇劉法印賢公侍史

尚々乍末

御渾家様へよろしく被仰上可被下候留守中

尚御心添奉願候 安良様へハ

乍憚別段奉呈無之候間よろしく

被仰被下可被下候頓首
又申上候

高階ニも活幼口議明写本相儲写手名氏無之候

得共福井本ヨリ整行端字易読御座候

先日申上候通人見本早々御上せ可被下候 草々

⑬

相分兼候尚御法事濟罷越候

積ニ相約昨夜五時罷帰候

右之次第古経卷書画之類

目ニ触れ不申候予楽公到

此節素人より両三種

真跡相談いたし候□□

尹大納言師賢書之詩懷

昏も一見了伴もよろしく奉

申□候扱先日之尊答

奉企望候外ニ

曹溶名医別録明清人未定稿鈔本

吳氏蘊要刊本

朝鮮本素問

証治要訣別本

右之類相談最中ニ

御座候食天本草景岳作

節抄若ク見江候鈔本

濟人宝笈劉曉之是等も

相談中ニ御座候医心方も

廿二軸永観古本一見出来

⑭

高階へ罷越申候処其後ハ格

別未見之別板も無之候昨十

四日崇蘭終日寛晤論

語史記周易等之古卷

前漢書宋本大小字各一

部後漢小字宋本韓

文古文尚書周易注疏

之類も精妙之宋板欵と

見申候外台今此に尚又

五六冊宋本有之近州

相促及搜索候処先人下

世何分函題而已ニ而見

出し不申候校本ハ崇蘭ニ

出来居申候帰府まで二者

尋出可申候瑞竹元版

葛氏肘後万曆宋字俗本

直指元版小児方同傷寒

并医脈缺清鈔三因
方之類昨日一見仕候未発

洩古卷経方も有之様子

⑮

九月廿日之御状昨日飛来

欣然拝読仕候先以

尊候万福恭賀至極

奉賀候往日謹告之通去廿二日

平安ニ到着仕候発足

前呈書謝厚意候処御丁

寧被仰下恐悚之至ニ奉存候

人物云々来教畏承候尚

可申上候福井会晤之事

前書申上候局方之事尚今

申話候桐山之事私も心

付相尋申候処当時古文

書類預り居申候林喜兵衛与

申老書估ニ祭文其外物

色中ニ御座候得共林喜無

如才ものニ付高価不可

当候大略何程ニ御座候ハ

祭文御取入ニ可相成候哉

⑯

落手仕早々校对取懸可申候又於

伊良子刊本一見仕候扱者不思

義二色々見仕候事ニ御座候

何分蔵物出しニ而可購入もの

無御座候大略過眼書目左ニ申

上候

畑隆平

碣石調幽蘭譜

これハ琴譜ニ而唐人之墨書卷本ニ御座候

錢舜拳撫閣立本旅葵図

傷寒縊要弘治刊本

其他無珍本右通経取出候処ハ四種也

遊豊司命録借置申候

百々陸奥守

養生主論与曲直瀬本別板之様ニ相見申候

元板百一選方

朝鮮本婦人良方二部別ニ相談取懸居申候

山居録古易簡方十二卷

覚岸劉思敬著本草附方ニ而御座候

方竜潭穀本草纂要十二卷

痘疹大全誠書雍正壬子刊本談文章

濟世良方十一卷陳仕賢浅草文庫本

(行間に追伸四行あるも難読につき省略。裏に「〇二」の書入あり)

⑰

宋本外台第十二

宋本尔疋経注本

南宋本周易注疏

古鈔和名抄十卷

宋本黎居士簡易方

序目 二

三四別宋本 五六七八九

七 十一古写

弘治本安老懐幼書四冊

隆慶本竜木論太略応永古鈔ニ類シ申候

葆先道人ノ本ト大異

嘉靖癸卯盛端明書本活幼口議二十卷一冊

密行細字行狎字不可読候右早々校読仕度候間

昨年校過仕候人見本早便御郵送可被下候

天順本救急易方

天平宝字三年東大寺開田地図

越中国射水郡鳴戸庄

(裏に「〇三」の書入あり)

⑱

謹啓霜寒益御莊健被為

在奉拝賀候仰從

松御殿不相替御玄猪御手

かちん被下置早速留守中より
為相登難有仕合奉頂戴候旅中

一入難有一向ニ玄猪も存出不申候
程之仕合ニ御座候処不相替留守中へ

拝領被仰付右御礼御序之節
宜敷被仰入可被下奉願候東

御殿よりも被下置是又難有宜敷
御礼奉願候先達而者

奥方様御安産御男子様
御出生之由目出度奉拜賀候旅

中御祝儀之印迄ニ御のし奉
献候よろしく御歎御惣客様江

被仰上可被下候活幼口議被遣
(追伸)

尚以霜威為天下蒼生
御自重奉祈候頓首

(以下行間に追伸十五行あるも難読につき省略。裏に「□」の
書入あり)

①9 可申候様子ニ御座候来月

十四五日発足ニ相成可申候
所色々及出程

御察可被下候下門之事ニ付

竜公人多事用談之隙
無之今日ハ

禁中御儀法開闢ニ而
暁七時ニ被出昨刻帰宅

大医明暁発駕ニ候
草略申上候琢隆兩

准□□ニもよろしく奉願候
大小天公同断乍恐一封

拙宅へ御達奉希候
何分ニも経方書一千之古巻ヲ

相携罷帰度候右件草々
奉述候恐惶謹言

十月望□ 質再拜 (花押)
楽真院様 参人々々

②0 来廿八日三角へ被相招候彼是

蔵書も可有之奉存候伊良子ハ
明代之方書能く読覚罷在候

懇ニ談説され各ニ及兼候
□往之□也慚愧之至ニ御座候

しかし太素新修之事未知
所蔵之所斗ニ而他処へ目ヲ触レ

不申候間程永培彙刻之蘇

沈も存居不申候同僚之つき

合もせずニ居申候様子近来ハ

書肆之出入も無之与相見申候

得共好書之翁ニ御座候右段

一甌之往来も申及兼候産宝

など為見申候而も驚不申候間

困りものニ御座候直訣

門序渋江より參候美濃も写し可

上置候福井へ相約候間早々被遣

可被下候仰待回音候恐惶

謹言 質再拜

十月廿六日

荏庭先生侍史

(裏に「□五」の書入れあり)

⑳

謹啓逐日霜寒相募候処

益御莊健被為在奉恭賀候然ハ

先日も御多忙中御答書被下

難有奉拜読候百事中草药へも

被為枉駕候段奉感謝候

其上娘不快ニ付尊診相願

御薬被下置候而頃日者快

方候段奉越願斗ニ候処何分尚又

宜敷奉願候保生院書中ニ

相伺申候件くれ々奉拝承早

喪申達候事ニ有之此云々ハ

素中ニ而相談いたし候処

町奉行より御戸伺も相成度申候趣ニ

御座候私儀在京中福高

家格別之応接之事

㉑

都合も宜敷一入高庇之余

栄ニ御座候去廿日午時発

京廿一日伏見より奈良へ着

仕候三輪初瀬多武峯

相見廿二三ニ而廿四日奈良へ

相戻罷成昨者東大寺

二月堂春日社大仏興福

致參詣候□ニ而古書之

搜索ニも及かね候春日卓ハ

奈良ニも無之候□在京中

色々書物も取入申候へ共有

振候品能□ニ無之哉

斗ニ御座候発足前之日

慶曆元祐間之名医方三卷

之中見存二卷意外ニ

借出奈良迄借来漸々
校写卒業治験も有之候

⑳

尤鈔本ニ御座候へ共昨日□□ニ為

持京都へ原本相返申候

福高之輩未鳥見之書ニ

御座候外ニ宋人方書之残本蜀

本大字ニ而一冊手ニ入申候

鈔本ハ御蔵ニも有之候品ニ而御座候間

不可為珍候へハ蜀大字本与

申処斗ニ御座候扱福井ニも古経方

別段ニ無之候新修本草六卷以外ニ

新写四卷借来申候高階

元版巢源清鈔総病論も

借来申候素靈微蘊积

義共借来申候□有之

寿親養老刻本呉氏蘊要

証治要訣之類福高之妨

有之手ニ入兼候尤借之相約

いたし罷在候廿八日奈良

相筭来月朔四日市

品川 十五日戸塚

㉑

十六日戸塚十七日之江戸

着ニ有之婦府早速

古書可差申上相楽罷

在候恐惶謹言

十一月廿六日 小島春庵(花押)

楽真法印様侍史

副白寒氣為蒼生御自重

御座候様奉祈候不乙

㉒

十月既望之御返詞相達

可捧回答多事

及延引瑤翰坂本へ

相携候先以

各位益御安健珍重ニ

奉存候老拙頗健抑

在京中之件々

御願望之儀御尤之事

日々同社之諸公存出

さぬ日ハ無之候扱京

医も大分ニ魔道へ

引込申候可有賢察候

しかし彼輩臨症

施治之際ニ一段感入
申候儀も有之候先ツ
高階ハ李東璧きらい

②6

ニ而惟一の唐慎微宗ニ御座候

福井所蔵之古刊旧鈔

老拙之説ヲ陳申候節色々

相分候間狂喜いたし居申候

権量之説ヲ高階ニ伝

申候彼大ニ服従いたし

申候其他不足勝

論候テト自讀メキ申候へ共実事也

宋槩余居士選奇方金

版儒門事親宋本三因ニは驚

目候伊良子本也証類ハ環

溪書院ノ元版也

三角典葉大允家ニも

蔵書有之候韓本直

指方之類ニ候古鈔本も

(裏に「二」の書入あり)

②7

有之候定良返書欣

展晴川法印括姜

枳実可然候何分よろしく

相願申候又従時宜

よ組の火消ハ日本橋

向へか、らぬ法も可有之候哉

清川全快之上ハ御引

渡被下たく候併任

賢裁候朔日到坂本

三日登山門四日看

唐崎松五日遊于

聖衆来迎寺明日

約抵松禪院以觀鄭

審則書七日帰京

陸台州書在滋賀院

草々奉復候頓首

(裏に「三」の書入あり)

②8

十一月五日 質再拝

渋江道純様

伊沢長安様

人々

尚々東坂本滋賀院

惣門内護門院主坊ニ

羈旅罷在候霜寒
不可当候此椀松下口

風尤急日下則

琵琶湖也門内禁

葷酒求糝不得無術

防寒即今得京信

郵來撰釀灯下

冷飲一醉製答

詞如是

(裏に「四」の書入あり)

〈復原考証〉

第一信〔十月一日〕①―②―③―④―⑤

②・③は紙背に「〇二」「〇三」の書入があることが参考になる。④後半は九月二十八日の福井氏崇蘭館での所見中の善本書目を記しており、同日同所の所見は『河清寓記』の一丁表から五丁表に相当する。⑤に記す書目が『河清寓記』一丁表から二丁裏に、⑥に記す書目が三丁表から五丁表に見出せることから、内容の上でも②―③として問題ない。

①末行に「錦小路目録」のことが見えており、『河清寓記』四三丁表の記事に相当する。②冒頭部分の書目が同記事に一致することから②前半の記事が錦小路家所蔵の医書に関するものであることがわかり、①―②と考えて問題ない。

⑦は崇蘭館所蔵書目に終始し、書簡完結の体裁としては疑

問が残る。続きがあつたと見る方が自然である。

一方、後に取り上げる十月九日書簡⑩に「往・日・謹告の通り、去る二十二日平安に到着」、「福井会晤の事、前書申し上げ候」とあり、これは明らかに①②の内容と一致している。ゆえに十月九日書簡は①―②―③書簡の次に発信されたものであると考えられる。①―②―③書簡中に見出される日付で最も後のものは九月二十八日であるから、この書簡はそれ以降、十月九日以前の執筆である。

かつ、書体と内容から明らかに連続すると考えられる④―⑤書簡がある。⑤は十月一日の日付を持つ。⑤は日付・追伸を有し、書簡の結びの部分の体裁を示しているにもかかわらず宛先がなく、①冒頭に異例の宛先と署名があるのと符合する。ゆえに①―②―③書簡は④―⑤書簡と同じく十月一日に発信された書簡であると考えられる。

ただし④―⑤は⑦に直結するものではなく、⑦と④の間に欠落があると考えられる。⑦の書目が福井氏崇蘭館での所見中の貴重書であり、『河清寓記』一丁表から五丁表にかけての著録中にその書名を見出すものであるのに対し、④⑤の書目は『河清寓記』中になく、かつ価格を付した商品であり、②⑦の書目とは性格を異にする。

宝素は京都滞在中、貴重書の借覧・校写をすすめる傍ら、購入にも意欲的であった。蔵書家の架蔵本に対しても食指を伸ばしたようだが、結局思ったほどの成果は得られなかったらしい。古藉商を通しての購入も行われたに相違なく、関係

を持った商人に十月九日書簡に見える「林喜兵衛」がある。林喜兵衛は三条通高倉西入に文晝堂を構えて、安永から天保にかけて活動し(井上和雄編『慶長以来書集覧』、昭和五三復刊、言論社)、寛政十一年の『備急千金要方』など三点の医書出版(小曽戸洋ら「和刻本漢籍医書出版総合年表」による)にも携った、江戸後期の京都の出版書肆である。傍ら古書も取扱つていたらしく、宝素と同行した海保漁村の訪書記録『古本留真譜』(尊経閣文庫所蔵)には林喜兵衛のもとで見た、明・万曆四十三年の刊記を有する『華嚴経』が著録されている。

第二信(十月九日)⑮—⑦—⑧—⑨—⑩—⑪—⑫

⑦から⑫までの順序は、仮整理番号が妥当である。⑦七行目から⑧十行目にかけては十月五日の梅尾・高雄への行楽を兼ねた訪書の記事である。『河清寓記』では八丁裏に著録がある。⑧後半—⑨—⑩前半にかけては、十月七日の高階氏医聖書院における所見所聞である。『河清寓記』六丁裏から八丁表にかけて著録があり、同一の書名が見出せる。⑩後半は三角氏・伊良子氏・錦小路氏・小森氏・畑氏の蔵書状況を略記し、⑪冒頭へと続く。⑪末尾には「浪花書目」のことが見え、⑫冒頭へと続く。⑦—⑧—⑨—⑩—⑪—⑫、いずれも文脈上破綻せず、書態も類似する。

ところで⑦は書簡の起筆の体裁ではなく、書態の類似からみて⑮が起筆部分に相当すると考えられる。⑮を⑦の前に置くと、⑮末尾—⑦冒頭は「大略、何程にござ候はば、祭文お

取り入れに相成るべく候や」—「早便仰せ知らされ下さるべく候」となり、問題なくつながるようである。

内容の点から見ると、⑮は前述のごとく十月一日の初信をふまえた第二信である。一方、⑫は十月九日の日付があり、追伸に「先日申し上げ候通り、人見本早々お上せくださるべく候」とある。この追伸は十月一日書簡⑮の「昨年校過つまつり候人見本、早便ご郵送下さるべく候」を承けたものであるから、十月九日書簡は十月一日に続く第二信であることがわかる。

以上のことから⑮は⑦—⑧—⑨—⑩—⑪—⑫と同じ十月九日に発信された、⑦の前に位置する書簡であると言える。

第三信(十月十五日)⑥—⑭—(欠カ)⑬—⑰

まず⑭に「昨十四日」とあることから、⑭が十五日に書かれたことは間違いない。可能性としては十月と十一月の十五日が考えられるが、十一月十五日は古書搜索を終えて離京する間際であり、精力的に高階・福井等を搜索中の⑭の内容にそぐわない。『河清寓記』に徴しても、福井氏再訪書目は十月上旬の高山寺所見より後、十月二十四日の仁和寺拝観より前の、一丁表以降数丁に位置している。よって⑭は十月十五日の書簡の一部と判断できる。

一方⑰は「十月望」の日付と差出・宛先を有し、⑭と同日の書簡の結びの部分であると考えられる。書体のくずし方からみても⑭と⑰は類似している。

ほかに書体の類似の点から、⑥と⑬が同一書簡の候補としてあげられる。文脈上から考えると⑥―⑭・⑬―⑰とつなげると文意が通じるようである。⑥末尾―⑭冒頭は「十三日再度」―「高階に罷り越し申し候ところ、その後は格別未見の別板もこれなく候」となる。十月九日書簡に十月七日の高階氏訪問の記事があったので、高階氏に訪れたのが十月十三日であれば当然再訪になるわけである。

⑭末尾―⑬冒頭は「未発洩古経方もこれある様子」「相分かりかね候」となつて文意がつかならず、欠落があるかと思われる。⑬末尾―⑰冒頭は「医心方も廿二永観古本一見出来」―「申すべく候様子にござ候」となり、一応文章はつながるが、⑰前半の文意が必ずしも明瞭でなく、欠落のある可能性もある。

⑬後半にあげられている書名は『河清寓記』一一丁表から一二丁表にかけて著録するところで、前述の十月十四日の崇蘭館再訪書目の直前に位置しており、十四日より少し前の所見書目と考えられる。ゆえにそれらを現在、購入・借鈔の「相談中」であるという文面は、十月十五日の書簡の内容として齟齬しない。

第四信〔十月二十六日〕⑱―⑲―⑳―㉑

裏面の書入が⑱⑲⑳にそれぞれ「□一」「□二」「□五」とあり、㉑が起筆、㉒が擱筆の体裁をとっていることから㉑から始まり㉒で終わる全五枚の書簡であると考えられる。

内容の面から見ても⑱―⑲は、⑲末行が「活幼口議」遣わされ」で終わっており、ここで言う「活幼口議」は十月一日書簡で崇蘭館所蔵の難読写本『活幼口議』の校読のために郵送を要請した、人見氏所蔵旧鈔本に基づいた本のことと考えられるので、⑲冒頭の「落手つかまつり、早々校対取りかかり申すべく候」に接続して問題がない。また⑲⑲ともに行間に追伸が書き込まれており、その書態の類似からも⑲―⑲の続き具合は自然である。

⑲の後半は百百陸奥守のところで所見の書目を記しており、『河清寓記』に徴すれば一八丁表から二〇丁裏にわたる百百氏所蔵所見書目中、一八丁表から一九丁裏までの部分に同書目が見出せる。『河清寓記』では宝素の百百氏訪問の日を「小春二十〇日」としており、日時の点でも十月二十六日書簡の内容として符合する。

第三紙の佚亡が惜しまれるが、第四紙は書体の類似から見て③が相当すると考えられる。③を第四紙と推定する時、第四紙紙背にあるべき「□四」の書入が③にないことが問題になるが、「□四」の書入があるべき場所である表面の書信最終行の下部、文面というところ「江戸風ヲ希候」の左側の部分が若干切れているので、原来③にあった「□四」の書入が失われてしまったと考えられるのである。

③を第四紙とする理由は次の二点である。I③の「京医気受よろしく、福・高末見の分も発洩云々」の文面が、畑柳平・百百陸奥守・伊良子千之堂を閲覧していた十月二十日前後の

宝素の動向に合致し、また第二紙の内容とも齟齬しないこと。
II③の二行目「宋槧零本白氏六帖事類集 一冊 三卷」は『河清寓記』に徴すると、二一丁表に見え、百百氏所見の後、伊良子氏所見の前に位置し、この時期に閲覧した書籍であることが知られるからである。

ただし③は第四信の第四紙と考えず、宝素の京都出発間際の十一月二十日より少し前の書簡と考えることもできる。そう考えれば「発足前、宋本『外台』なにごん出しかね申し候」は十月十五日書簡の時点で仄聞した宋刊『外台秘要方』が一ヶ月余の探索にもかかわらず閲覧できなかったこととなり、「在京中、万事省略いたしまかりあり候ところ、多分の物入り、意外の事態」という語句も納得できる。一方、第四信の一部と考えた時には、宝素は十一月一日からしばらくの間、近江周遊に出かけているので、「発足」とはそのことを指し、それを前に十月いっぱい京都の医家蔵書の探索に一応の目途をつけたころの書簡の内容と考えれば、右の語句は矛盾を来さない。

『河清寓記』は、十月二十八日所見の三角氏蔵書までで全体の三分の二の二八丁を費して、この後の京都での所見は高階氏と福井氏の三訪時のものと青蓮院とを残すのみであり、こうした探索状況を証している。

③は第四信第四紙と十一月二十日直前ごろとの二つの可能性があることを認めつつも、ここでは書態の近似から第四信第四紙とする。

第五信（十一月五日）^{②5}—^{②6}—^{②7}—^{②8}

^{②6}^{②7}^{②8}の裏面にそれぞれ「二」「三」「四」の書入があり、仮整理番号の順序もそれに従っており妥当である。この書簡が書かれた十一月五日は、宝素が十月中の京都での精力的な古医書搜索をひとまず切りあげ、十一月一日から坂本・比叡山・唐崎の松・聖衆来迎寺等、近江の景勝地を遊覧している時期である。旅中ではあるが、京都での訪書中よりも比較的時間に余裕があったためか、他の書簡より文字が整っている。書体・文面から見ても^{②5}—^{②6}—^{②7}—^{②8}として問題ない。宛先が本書簡のみ多紀元堅でないことが注目される。

六信（十一月二十六日）^{②1}—^{②2}—^{②3}—^{②4}

仮整理番号の順に従って問題ないようである。^{②1}末尾—^{②2}冒頭は、京都滞在中の、福井・高階両氏から与えられた厚遇は、多紀氏の庇護のおかげであると謝意を表する。^{②2}末尾—^{②3}冒頭は、京都発足の前日、十一月十九日に予想外に『名医方』を借り出すことができたので、奈良に携行して急いで校写をすませ、昨二十五日に原本を返却したという内容である。^{②3}末尾—^{②4}冒頭は、近日奈良を発ち江戸に帰るまでの大まかな旅程を知らせている。

〈釈文〉

第一信（十月一日）

蔭庭先生侍史 質

謹啓、朝夕は冷気相募り候ところ、ますます御清穆あらせられ、恭賀至極に存じ奉り候。そもそも去る二十二日、到着以後、塵紛蠟集の中に、保生院訪れ来り、寛晤に及び候ところ、『聖恵』宋本、校対いたしこれあり。『巢源』開雕の事はしかと相決しかね、福井・山本・高階など、色々相争ひまかりあり候様子にござ候て、いまだ『巢源』浄写も出来申さざるやうに相見え申し候あひだ、厚く愆憑いたしおき候。錦小路目錄に『養生要集』・『明堂図』・『医心方』足本・『太素』・『新修本草』足本など相見え申し候。虚実相分ならず、『小品』は一軸分、御室より錦家へ先年借来、微力にて写すに及びかね候様子に承り及び候あひだ、専ら搜索心懸けまかりあり候。保生院へよろしく申し上げたく、聞けられ候。

一、二十八日早朝と夜分に、福井父子閑話いたし候。九十老人、六十のごとき人にござ候。『太素』原巻など取り出し申し、見せ申し候。なかんづく

『楊氏家蔵』小字・宋本・『吉氏家蔵』印あり。不足本にて荻野本により補写。

宋本『夷堅志』甲・乙・丙三集

元版『杜氏玉函經』

宋本『外台』第十二

宋本『尔疋』經注本

南宋本『周易注疏』

古鈔『和名抄』十卷

宋本『黎居士簡易方』

序目 二

三四別宋本 五六七八九

七十一古写

弘治本『安老懷幼書』四冊

隆慶本『竜木論』

太略、応永古鈔に類し申し候。葆光道人の本と大異。

嘉靖癸卯盛端明書『活幼口議』二十卷一冊

密行細字、行狎字、読むべからず候。右早々校読つかまつりたく候あひだ、昨年校過つかまつり候人見本、早便

ご郵送下さるべく候。

天順本『救急易方』

『天平宝字三年東大寺開田地図』越中国射水郡鳴戸庄

(以下欠カ)

書目

一『医学四種』二帙 一両二朱

一『本草綱目求真』二帙

一『弁症奇聞』二帙十卷 錢松道光二年自序 三両二朱

一『医学括要』一帙 一両二朱

一『鮑刻名医類案』三分二朱

本『有林福田方』、二両一分あり。目安申し越し申し候。安良様、仰せ上げられ下さるべく候。

又

一石渠閣訂正『食物本草』十卷 李杲

卷七まで同題。卷八「石渠閣訂正日用本草」と題しこれあ

り。元・呉瑞。

一『食物本草』三卷 陳繼儒校正

右、巾箱小本、二部一函、代一函一分

又

一袁元熙刊本『局方』一方半

一『徐氏鍼灸』四匁五分

一『傷寒全生集』二分

一『本草集要』『吉氏家藏』本、一函二朱

一『明目良方』一方二朱

一『外科正宗』一分、唐本、書き足しこれあり。

一『五雅』三分二朱

右之類、早朝申し来り候あひだ、申し上げ候。『弁証奇聞』、相応に相見え申し候。御目錄中、これ無きやに相見え候あひだ、申し上げ候。勿々頓首。十月朔日。

なほなほ、宋版『東坡集』、朝鮮小字本『得効方』（活字でなし）残本三冊、手に入り申し候。右の件、告げ奉り候。

第二信（十月九日）

九月廿日の御状、昨日飛来。欣然、拝読つかまつり候。先づもつて尊候万福、恭賀至極、賀し奉り候。往日、謹告の通り、去る廿二日平安に到着つかまつり候。発足前、書を呈し厚意に謝し候ところ、御丁寧仰せ下され、恐悚の至りに存じ奉り候。人物云々、来教畏く承り候。なほ申し上ぐべく候。福井会晤の事、前書申し上げ候。『局方』の事、なほ今申し話し候。桐山の事、私も心付け相尋ね申し候ところ、当時、古文書類

預りをり申し候、林喜兵衛と申す老書估に、祭文そのほか物色中にござ候へども、林喜、如才なきものにつき、高価当つべからず候。大略、何程にござ候はば、祭文お取り入れに相成るべく候や。早便仰せ知らされ下さるべく候。尤も^四木の信にて、元仲悴へ直対もつかまつるべく候へども、この節、同人専ら風俗の悪説申し出で、牢舎いたし罷りあるやにて、なかなか罷り越しかね候次第にござ候。堂上の短冊・壞紙、畏まり候。先日、近州先達にて梶尾・高雄に登り申し候。霜葉の様子、目忘帰申し候。梶尾、方便智院・十無尽院、両僧欣接。『玉篇』そのほか、古経史残軸一見つかまつり候。石川年足真跡の経、そのほかにも仏経夥しく、また解脱・明恵らの消息、和氣広世の写経などこれある趣きのところ、初更に相成り、見残し申し候。『養生月令』等これ無く候。唐櫃、弘仁・建久などの朱書相題し申し候もの、一百余函これあり候。一時出蔵相成りかね申し候やに申しをり候。近日また了伴相携へて罷り越し候事にござ候。伴子、来る十五日発足、出府候あひだ、ご直聞下さるべく候。卑意、医藉のみに専心罷りあり候あひだ、釈典・文書、木石のごとく、過眼つかまつり候。しかるところ、何分、医書の類、福・高両氏の搜索行き届き候あひだ、草沢の医生も余風に化し、聚書のこと用力を用ひ候あひだ、『玉機微義』などさへ羽翼を生じ申し候て飛行いたし候。朝鮮本『素問』残本、手に入り申し候。『得効方』も整版にて三冊にござ候。

七日、高階安芸守の招きにて、七十老翁、病後にはござ候へ

ども、談論面白くござ候。鷹峰に隠棲罷りあり候。脩竹小徑、回曲三・四十歩、張師の祠堂これあり。その傍らに座敷これあり。幽静の場にてござ候。元版『菓源』。清人影写小楷『総病論』。宋本『本草衍義』、望月本と小異なる様にて、元初の紙にこれあるべきか。汪濟川方鉉・吳勉学の『菓源』もいちいち相揃ひ、清人写本もござ候へども、倣汪本にござ候。校正も相応に相届きをり申し候。明・清の書まで丹鉛万書に満ち、老翁の手に出で申し候。『胎産要録』上下巻、朝鮮の撰述か。『素靈微蘊』黄元御道光十年刊本。『素問積義』張琦道光九年刊本。二書格別のものこれなきやに相見申し候。徐注『金匱』も刊本にござ候。嘉靖本『医説』、藩本の祖か。大略、右の類にて、また十三日に罷り越し申し候つもりござ候。この翁、世縁を謝し、昼夜誦読筆記、残年を消し申し候様申しをり候。しかるところ、福井の所蔵は相互に秘惜いたし、『懸解』など高階よりかし遣はし、『類聚』一冊も僅かに写し候様なる情態にて、春輩の中間に相夾まれ、崇蘭の所蔵取り出し申し候こと、悦び罷りあり候へども、崇蘭にては高階に加意せしめ申し候様にいたしたき様子に相見え申し候。一笑に堪へず存じ奉り候。なにとぞなにとぞ小翰を以て御安否相伺ひ、御高説も相伺ひたく、老後の至願にござ候様申し出で候。尤も『菓源』そのほか『総病論』も直にかし渡し申し候様なる氣質にござ候。江戸へ持ち帰り候様申しをり候。旅舎にて校讀いたし候へば、手広く搜索の専心行き届き申すまじく、自蔵の分は幾部にても秘本持ち帰り候様にくれぐれ申しをり候

あひだ、甚だ都合よろしくござ候。倅美濃守、好学の様子に承り及び候。評判にては近州に及ばずと申し候。翁は大略、恕公と良知混合いたし、望鹿門の好書を取り交ぜ、敵穀恩純の叟に相見え、療治も張師の規模に相遵ひ、葛・陶・孫・王の辺にて事を済ませ、張・劉・李・朱の方は用ひぬなど申しをり、また香・吉の余流にもこれなく候。再接して還り、なほ観閲の書目申し上ぐべく候なり。

三角、格別の品これなき様子。伊良子、多分相蔵し、福・高の力にて出で申さざる趣き聞けられ候。錦某良に信ずべき古書これなく候へども、御室の外戚(御実母の所生家)にて、『太素』の類は自在に相成り申し候ことにてござ候。小森典葉頭は丹波家の嫡流にて、これは古物もこれあるべく候様に申しをり候。医学院、一書なく候。同人別家・畑隆平、好古篤学にて、少しは書物も相残りをり申し候あひだ、伺ひ見申すべく、聞けられ候。いまだ罷り越さず候。海保生、別条なし。「看楓記」左右いたし候。京中、風物尤も妙、賞遊にいとまなく候。隆法眼盛寵、嘉すべし嘉すべし。大小天狗集会云々、欣羨の至り、「欣賞略目」拜見相願ひ申し候。古書画、疑ふべきもののみ持ち来り申し候あひだ、骨董御留につかまつり候。春日卓も見当たり申さず候。素人の同臭味に相頼み置き候へば、出来申すべく候やにござ候。美人も夥しく目に入り候へども、粉黛満面、心を動かすに足らず候あひだ、「京洛佳人多し 青娥と朱唇と……何物か真に是れ真」と申す寓言を吐き出し申し候へば、畑隆平の説に、これは福井の朱欄玉簾を諷し申し

候ものか、と一笑つかまつり候。弘・正・嘉・万前後の刊本子集などは多く相見え申し候あひだ、略目、先日、九層に寄せ去り候。いまだ報書を得ず候。「浪花書目」も取り寄せ候へども、さしたるものもこれなく候。右件、草略復し奉り候。時まさに寒ならんとす。道のために自重をこれ祈り候。弟子質、稽首拜復。十月九日、奚暇劉法印賢公侍史

なほなほ、末ながら御渾家様へよろしく仰せ上げられ下さるべく候。留守中、なほ御心添へ願ひ奉り候。安良様へは憚りながら別段奉呈これなく候あひだ、よろしく仰せられ下さるべく候。頓首。

また申し上げ候。高階にも『活効口議』明写本相儲け、写手名氏これなく候へども、福井本より整行端字、読み易くござ候。先日申し上げ候通り、人見本、早々おのぼせ下さるべく候。草々。

第三信（十月十五日）

一筆啓上つかまつり候。御用人御代拜まかり登られ候につき、松御殿様ますます御機嫌ござあそばされ候むね伺ひ奉り、恐悦奉り候。朝夕は寒氣相催し申し候ところ、いよいよ御莊健あらせられ、拝賀奉り候。そもそも先だつて以来、福井父子一通りならざる取り扱ひにて、おひおひ秘蔵も借説いたし、かれこれ周旋申し候。高山寺の経蔵も相捜し申し候ところ、何分張・孫両氏の書しぎなく候。『論語』『莊子』などの古巻本のみにござ候。『香字抄』類のものも相見申し候へども、格

別の品これなく候。十三日、再度高階へ罷り越し申し候ところ、其後は格別未見の別板もこれなく候。昨十四日、崇蘭終日寛晤。『論語』『史記』『周易』などの古巻。『前漢書』宋本大小字各一部。『後漢書』小字宋本。『韓文』『古文尚書』『周易注疏』の類も精妙の宋板かと思申し候。『外台』今こになほまた五・六冊宋本これあり。近州相促し、捜索に及び候ところ、先人下世、なにごん函題のみにて、見出し申さず候。

校本は崇蘭に出来をり申し候。帰府までには尋ね出だし申すべく候。『瑞竹』元版。『葛氏肘後』万曆宋字俗本。『直指』元版、『小児方』同、『傷寒』並びに『医脈』缺。清鈔『三因方』の類、昨日一見つかまつり候。未幾洩・古経方もこれある様子（欠アルカ）

相分かりかね候。なほ御法事箇罷り越し候つもりに相約し、昨夜五時罷り帰り候。右の次第、古経巻・書画の類、目に触れ申さず候。予業公この節に到り素人より両三種相談いたし候。□□尹大納言師賢書の詩帳紙も一見、了伴もよろしく申し□奉り候。さて、先日の尊答、企望奉り候。ほかに

曹溶『名医別録』明・清人未定稿、鈔本
吳氏『蘊要』刊本 『寿親養老』元版
朝鮮本『素問』 『証治要訣』別本

右の類、相談最中にござ候。『食天本草』景岳作、節抄のごとく見え候。鈔本『濟人宝笈』劉暁之、これらも相談中にござ候。『医心方』も廿二軸・永観古本、一見出来申すべく候様

子にごご候。来月一四・五日発足に相成り申すべく候ところ、いろいろ出程に及び、心事お察し下さるべく候。下門のことにつき、竜公人多事、用談の隙これなく、今日は禁中御職法開闢にて、暁七時に出られ昨刻帰宅、大医明暁発駕に候。草略申し上げ候。琢・隆兩准□□にもよろしく願ひ奉り候。大小天公同断。恐れながら一封拙宅へお達し希ひ奉り候。なにぶんにも経方書一千の古巻を相携へ罷り歸りたく候。右件、草々述べ奉り候。恐惶謹言。十月望□ 質再拜(花押) 葉真院様 人々中参る

なほなほ、冷中、在京中には弟子どもはじめ、取締方心配つかまつり候ところ、まづまづ平穩にて安心つかまつり候。江都のご様子、伺ひ奉りたく候。(以下難読につき省略)

第四信(十月二十六日)

謹啓、霜寒、ますます御壮健あらせられ、拝賀奉り候。そもそも松御殿より相替らず御玄猪、お手かちん下し置かれ、早速、留守中より相登せ、ありがたきしあはせ、頂戴奉り候。

旅中、ひとしほありがたく、一向に玄猪も存じ出し申さず候程のしあはせにごご候ところ、相替らず、留守中へ拝領仰せつけられ、右御礼、お序での節、よろしく仰せ入れられ下さるべく願ひ奉り候。東御殿よりも下し置かれ、これまたありがたく、よろしく御礼願ひ奉り候。先だつては奥様ご安産、御男子様ご出生のよし、めでたく拝賀奉り候。旅中、御祝儀のしるしまでに、御のし献じ奉り候。よろしくお喜び御惣客

様へ仰せ上げられ下さるべく候。『活幼口議』遣はされ、落手つかまつり、早々校対とりかかり申すべく候。また伊良子において、刊本一見つかまつり候。さては不思議にいろいろ見つかまつり候ことにごご候。なにぶん蔵物出しにて、購入すべきものごごなく候。大略、過眼書目、左に申し上げ候。

畑隆平

『碯石調幽蘭譜』これは琴譜にて、唐人の墨書、巻本にごご候。

『錢舜拳撫・閣立本旅葵図』

『傷寒蘊要』弘治刊本

そのほか珍本なく、右通経、取出候ところは四種なり。

『遊豊司命録』借り置き申し候。

百々陸奥守

『養生主論』曲直瀬本と別板のように相見え申し候。

元版『百一選方』

朝鮮本『婦人良方』二部別々相談とりかかりをり申し候。

『山居録古易簡方』十二巻、覚岸劉思敬著、『本草附方』にて

ごご候。

方竜潭穀『本草纂要』十二巻

『痘疹大全誠書』雍正壬子刊本、談金章

『濟世良方』十一巻、陳仕賢、淺草文庫本

(欠アリ)

『素問積義』六冊

宋槧零本『白氏六帖事類集』一冊三巻、一覽、金沢本

吹田くわゐ

右の類、なかなか一人の力にては早奏の内、校写卒業いたすまじく候あひだ、一編を通じ申し候。契約つかまつり候ぶんは、早々返却、なほまた借り受け申したく候あひだ、なにとぞ筆者多人ご用意下さるべく候。校対のことも諸君へ相願ひ申したく候。なにぶんにも手に入り申し候品これなく、その段は失望の次第にござ候。発足前、宋本『外台』なにぶん出しかね申し候。在京中、万事省略いたしまかりあり候ところ、多分の物入り、意外の事態にてござ候へども、別条なく在勤つかまつり候段、ご放意下さるべく候。さりながら、京医の気受よろしく、福・高末見の分も発洩いたし申し、拙老よりおひおひ福・高へ転借のことも相約し申し候。これは江戸風を希ひ候。来廿八日、三角へ相招かれ候。かれこれ蔵書もこれあるべく存じ奉り候。伊良子は明代の方書よく読み覚えまかりあり候。慙ろに談説され、各々に及びかね候。□往の□なり。慙愧の至りにござ候。しかし『太素』『新修』のこと未知。所蔵の所ばかりにて、他処へ目を触れ申さず候あひだ、程永培彙刻の『蘇沈』も存じをり申さず候。同僚のつき合ひもせず居り申し候様子、近來は書肆の出入りもこれなしと相見え申し候へども、好書の翁にござ候。右段、一編の往来も申し及びかね候。『産宝』など見せ申し候ても驚き申さず候あひだ、困りものにござ候。『直訣』門序、渋江より參候。美濃も、写し上げ置くべく候。福井へ相約し候あひだ、早々遣はされ下さるべく候。回音を仰ぎ待ち候。恐惶謹言。質再拜

十月廿六日 菫庭先生待史

なほもつて霜威、天下蒼生のためにご自愛祈り奉り候。頓首。
(以下、多武峯の僧の強訴に関する記事が⑱⑲の行間に追記されているが、難読のため省略)

第五信(十一月五日)

十月既望の御返詩相達し、回答を捧ぐべきに、多事、延引に及び、瑤翰、坂本へ相携へ候。先づもつて各位ますます御安健、珍重に存じ奉り候。老拙頗る健。そもそも在京中の件々、御願望の儀、ご尤もの事。日々同社の諸公、存じ出さぬ日はこれ無く候。さて京医も大分に魔道へ引き込み申し候。賢察有るべく候。しかし彼の輩、臨症施治の際に、一段感じ入り申し候儀もこれあり候。先づ高階は李東璧きらひにて、唯一の唐慎微宗にござ候。福井所蔵の古刊・旧鈔、老拙の説を陳べ申し候節、いろいろ相分かり候あひだ、狂喜いたしをり申し候。権量の説を高階に伝へ申し候。彼大いに服従いたし申し候。そのほか勝けて論ずるに足らず候。チト自讃めき申し候へども実事なり。宋槧『余居士選奇方』、金版『儒門事親』、宋本『三因』には目を驚かし候(伊良子本なり)。『証類』は環溪書院の元版なり。三角典葉大允家にも蔵書これあり候。韓本『直指方』の類に候。古鈔本もこれあり候。定良返書欣展。晴川法印、括・姜・枳実、しかるべく候。なにぶんよろしく相願ひ申し候。また時宜に従ひ、よ組の火消は日本橋向かふへかからぬ法もこれあるべく候や。清川全快の上はお引き渡し下されたく候。しかし賢裁に任せ候。朔日、坂本に到

り、三日、山門に登り、四日、唐崎の松を看、五日、聖衆来迎寺に遊び、明日は松禪院に約抵して以て鄭審則の書を観んとす。七日帰京。陸台州の書、滋賀院に在り。草々復し奉り候。頓首。十一月五日 質再拜

波江道純様 伊沢長安様 人々

なほなほ、東坂本滋賀院惣門内、護門院主坊に、羈旅まかりあり候。霜寒当つべからず候。此松下□、風尤も急、目下は則ち琵琶湖なり。門内、葷酒を禁じ、桑を求むれども得ず。寒を防ぐに術なし。即今、京信の郵来するを得て、醸に灯下に接す。冷飲一酔、答詞を製することかくのごとし。

第六信 (十一月二十六日)

謹啓、逐日霜寒相募り候ところ、ますます御壯健あらせられ、恭賀奉り候。しかれば先日も御多忙中、御答書下され、ありがたく拝読奉り候。百事中、草宿へも枉駕せられ候の段、感謝奉り候。その上娘不快につき、尊診相願ひ、お葉下し置かれ候て、頃日は快方候段、越願奉るばかりに候ところ、なにごふんなほまたよろしく願ひ奉り候。保生院、書中に相伺ひ申し候件、くれぐれ拝承奉り、早喪申し達し候ことにござ候。

この云々は素中にて相談いたし候ところ、町奉行より御戸伺ひも相成りたく申し候趣きにござ候。私儀、在京中、福・高家格別の応接のこと、都合もよろしく、ひとしほ高庇の余業にござ候。去る二十日午時、発京。二十一日、伏見より奈良へ着つかまつり候。三輪・初瀬・多武峯相見二十二・三日に

て、二十四日奈良へ相戻りまかり成り、昨は東大寺・二月堂・春日社・大仏・興福、参詣いたし候。□にて古書の搜索にも及びかね候。春日卓は奈良にもこれ無く候。在京中、いろいろ書物も取り入れ申し候へども、ありふれ候品、能□にこれなきやばかりにござ候。発足前の日、慶曆・元祐間の『名医方』三巻の中、見存二巻、意外に借り出し、奈良まで借り来り、漸く校写卒業。治験もこれあり候。尤も鈔本にござ候へども、昨日□□に持たせ、京都へ原本相返し申し候。福・高の輩末鳥見の書にござ候。ほかに宋人方書の残本、蜀本大学にて、一冊手に入り申し候。鈔本は御蔵にもこれあり候品にてござ候あひだ、珍と為すべからず候へば、蜀大字本と申すところばかりにござ候。さて、福井にも古経方、別段にこれなく、『新修本草』六巻以外に新写四巻借り来り申し候。高階、元版『巢病』、清鈔『総病論』も借り来り申し候。『素靈微蘊』『釈義』とも借り来り申し候。□有の『寿親養老』・刻本呉氏『蘊要』・『証治要訣』の類、福・高の妨げこれあり、手に入りかね候。尤も借の相約いたしまかりあり候。二十八日、奈良相発し、来月朔四日市、十六日戸塚、十七日の江戸着にこれあり、帰府、早速、古書差し申し上ぐべく相葉しみまかりあり候。恐惶謹言 小島春庵(花押) 十一月二十六日 葉真法印様待史

乙 副白、寒氣、蒼生のため御自重ござ候やう、祈り奉り候。不

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)